

現在、日本でうたわれている「子どもの歌」は、いつ頃からつくられたのでしょうか。

江戸時代以前の子どもは、「わらべうた」をうたって遊んでいました。「わらべうた」には、「あそびうた」や「てまりうた」、「こもりうた」などが含まれています。そして、地域や子どもの間でうたい継がれ伝わってきました。

「子どもの歌」の歴史

1868年に明治維新をむかえた日本は、1871年に学術、教育を担当する官庁として「文部省」を設置しました。また、1879年に西洋音楽や音楽教育を調査する機関として「音楽取調掛」を開設しました。そして、アメリカの音楽教育家L. W. メーソン（1818～1896）を招聘し、西洋音楽の移入を行いました。

L. W. メーソンの指導を受けた伊澤修二（1851～1917）らは、子どもがうたえる歌をつくりたいと考え、まず、外国の楽曲に日本人が詩を付けた「唱歌」をつくりました。その中に、ドイツ民謡「Hänschen klein」のメロディに、国学者の野村秋足（1819～1902）が詩を付けた「ちょうちょう」や、スコットランド民謡「Auld Lang Syne」のメロディに、国学者の稲垣千穎（1845～1913）が詩を付けた「蛍の光」などがあります。

大正時代になり「童謡運動」が始まり、児童雑誌「赤い鳥（1918）」や「金の船（1919）」が発行されました。そして、雑誌に掲載された詩（童謡）にメロディが付けられ、「童謡」がつくられました。その中に、「からたちの花（北原白秋・詩／山田耕筰・曲）」や「七つの子（野口雨情・詩／本居長世・曲）」などがあります。

昭和時代になり第二次世界大戦が終わると、「童謡」に代わる「新しい子どもの歌」がつくられるようになりました。そして、1961年にNHKの「みんなのうた」が始まり、日本テレビの「おはよう！こどもショー」やフジテレビの「ママとあそぼう！ピンポンパン」など、子どものためのテレビ番組で「子どもの歌」が紹介されるようになりました。

このような歴史をたどって、「子どもの歌」は、私たちの生活の中に根づいたものとなりました。あなたは、どんなジャンルの音楽が好きですか。